

受光効率を高め 秋まき小麦を安定して穫る

概要 Abstract

①道央でも、起生期を無追肥とする幼穂形成期重点追肥で、受光態勢を向上させながら起生期追肥と同等の収量が得られます。

②幼形期重点追肥によって、葉が直立しやすくなり、葉の量が適度となるため、受光態勢が向上します。

③安定生産の目標穂数550～650本/㎡と、良好な受光態勢を確保するための指標を設定しました。

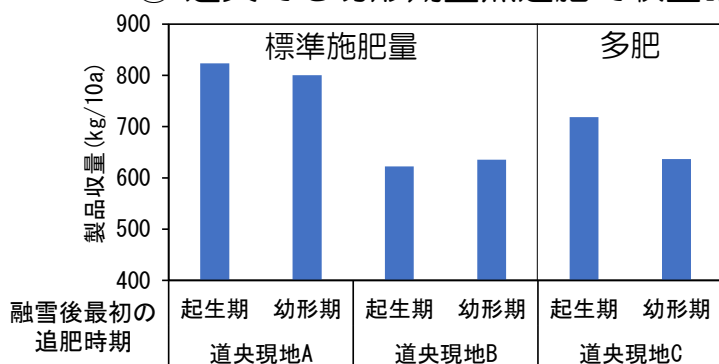
真上からの様子（登熟時期）



地面が見えるぐらいでちょうど良い

成果 Results

① 道央でも幼形期重点追肥で収量確保。起生期茎数で施肥を判断（道央）

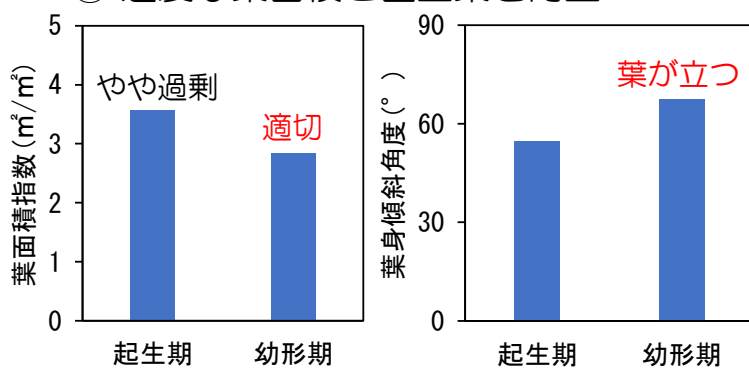


起生期茎数 (本/㎡)	窒素追肥(kg/10a)	
	起生期	幼形期
1000 以上	0	6
800～1000	2	4
800 未満	6	4

起生期を無追肥とすると、受光態勢が向上
適期・適量播種で起生期茎数1000本/㎡確保！

標準施肥量：幼形期重点追肥で起生期追肥とほぼ同等
多肥：// 減収する場合も

② 適度な葉面積と直立葉を両立



③ 安定生産に向けた生育の目安

生育期節	項目	道央	道東 ¹⁾
越冬前	主茎葉数	5.5～6.5	4～6
	茎数(本/㎡)	800～1250	550～900
起生期	茎数(本/㎡)	1000～1400	1000～1500
止葉期	全茎数(本/㎡)	800～1000	—
	上位茎数(本/㎡)	590～750	620～800
開花期～乳熟期	穂1本葉面積(cm²) ²⁾	～54	
	葉面積指数(m²/m²) ²⁾	2.8～3.5	
成熟期	穂数(本/㎡)	550～650	

1)オホーツク沿海は除く。登熟期間中の日照が多いため、従来通り

2)葉面積は上位3葉の値

普及 Dissemination

- ・幼穂形成期前に葉色が急に褪めたら、その時点で追肥してください。
- ・高タンパクになりやすいほ場では、止葉期追肥量を減らしてください。

連絡先 Contact

中央農業試験場
農業環境部 生産技術グループ
0123-89-2001
central-agri@hro.or.jp